

第2回

# 美学・藝術論研究会

## 研究発表会

### 開催概要

**日時** 2016年12月17日（土）  
13時－17時

**会場** 東京藝術大学 上野キャンパス  
美術学部 中央棟2F 第5講義室

※参加費は無料です。  
※どなたでもご自由にご参加ください。

### 研究発表

**大澤 慶久**

高松次郎における近代主義の検討  
——李禹煥との対談を基礎に

**大道 周作**（東京藝術大学）

メルロ＝ポンティにおける絵画と現実世界  
——「表現の働き」としての芸術

**横山 奈那**（東京藝術大学）

嗅覚の復権  
——フランス啓蒙思想における匂いの哲学的考察

### お問い合わせ

東京藝術大学美術学部美学研究室内 美学・藝術論研究会事務局  
Phone: 050-5525-2250 / Email: geidai.bigaku@gmail.com

## 第2回 美学・藝術論研究会 研究発表会

日時：2016年12月17日（土）13時～17時

会場：東京藝術大学 上野キャンパス 美術学部 中央棟2F 第5講義室

### 高松次郎における近代主義の検討 ——李禹煥との対談を基礎に

大澤慶久

日本の現代美術の歴史において、表象作用の問題について積極的に思索し、それについての重要な文章を残した芸術家の中に、李禹煥と高松次郎がいる。李は後年「もの派」と呼ばれる美術動向のイデオログとして、1960年代末から近代の表象批判を活発に行い、それに先立って高松は60年代半ばから「影」や「遠近法」などの多くのシリーズにおいて表象作用の問題に取り組んでいた。この二人を、表象作用や人間中心主義を批判的に検討した日本の代表的な芸術家と考えて差し支えないだろう。だが、それなりに知られているように、李は69年の高松論において彼を表象主義として批判している。李が高松をこのように捉える要因は幾つかあるが、その一つとして意識についての彼の積極的な言及が挙げられる。例えば、73年の李と高松の対談「理性・理念・情念・意識…」である。李は、本対談において理性（あるいは意識についての意識）に積極的な役割を認める高松の一連の発言に関連して、「理性という概念を取り出してクローズ・アップすることこそいかに近代である」と対談末尾にもらしている。さて、実際に高松は近代主義であったと言えるのだろうか。

これまでの高松研究や批評には、理性や意識に関する高松の諸見解への論及を通じて、彼が近代主義であったか否かを明示したものはなかった。だが、これは一度丁寧に検討される必要がある。というのも、高松は意識の観点から自身の思索を展開することが比較的多く、とすれば近代主義的な意味での意識論者として捉えられかねないからである。そこで本発表は、73年の本対談を議論の基礎にし、李と高松の理性に関する見解を対比的に捉えながら高松の考えを取り出す。その際には、さらに高松の別のテキストを参照することによりその見解を敷衍、補強する。

本発表はこの手続きを通じて次のことを明らかにする。李のいう近代主義の最も重要な点は理性を絶対的な基準とみなし、それにより世界を合理的にとらえることであるが、高松の考えはそうではない。高松にとって理性とは、あくまで意識についての意識に留まるものであり、ある出会いが出会いであることを、時代の制約下にある理念のもと、いくつも並行してある別の意識と照らし合わせ緊張の強度においてチェックする機構である。つまり、高松にとって理性が用いるパラメーターは相対的であり、それはあくまで非合理的なものなのである。もちろん、理性という語を用い、意識のいわば反省的な側面をクローズ・アップすることが、理性主義、人間中心主義とみなされる原因になるということはずげない。ただ、それは高松が同時代の過度な反理性や反意識的な考えに対して距離を置き、その基本的な働きを彼なりに検討していたということであって、それを絶対視していたというわけではない。したがって、高松は近代主義であったとは言えないのである。

### メルロ＝ポンティにおける絵画と現実世界 ——「表現の働き」としての芸術

大道周作（東京藝術大学）

メルロ＝ポンティにおいては、芸術と現象学は同じ営みと考えられている。それは、この両者が「世界や歴史の意味」をその「生まれ出でんとする姿」において把握しようとする意志を持つからである。この意図の下にある彼の現象学が示す「現象学的世界」とは、「われわれの経験の直接的記述の試み」であり、芸術もこの試みと無関係ではない。したがって、「絵画は、いかにも実物らしく見せかけるものではない」のであり、その鑑賞においては、「芸術作品は知覚物と同じように見られる、あるいは理解されることになる」。しかしながら、このように芸術作品が知覚物と同じように捉えられるとはいえ、この両者の間には相違が認められなければならない。そうでなければ、芸術作品はその存在意義を失うことになるであろう。したがって本発表では、メルロ＝ポンティの芸術論における絵画と現実世界との相違を、「意味」の観点から示すことを試みる。

われわれが現実世界について語り得るのは、われわれがそれを知覚するからである。この現実世界は、実在論の意味における世界のような純粋な存在ではありえない。なぜなら視覚はすでに一つの意味によって住まわれているからであり、「意味」とは「己以外のものに向かって偏光させられた存在」だからである。現実世界においては、「意味」は「存在」から区別され得るものではなく、「意味が存在と一体をなしている」。それに対して、絵画においては「意味が存在に先行している」。したがって、現実世界と絵画に「同じ堅固さ」を要求することはできないのである。このような、絵画における「意味」と「存在」の在り方は、彼が論じる現象学的世界におけるそれに他ならないものである。現象学的世界においては、「意味」は、知覚主体による諸経験の絡み合いによって顕れてくるのであり、それは世界の両義性〔あるいは曖昧さ〕（ambiguïté）を表現することによって示される。それ故に彼は、「哲学とは、先行しているはずの或る真理の反映ではなくて、芸術と同じく或る真理の実現なのである」と言い得るのである。

本発表が粗上に載せるのは、メルロ＝ポンティの芸術論において画家は何を表現すると考えられているのかという極めて素朴な問いである。メルロ＝ポンティによれば、芸術は模倣でもなければ、本能や良い趣味が求められるところに従った産物でもなく、また、その芸術作品においては形式と内容は個別に存在するものではない。このような考え方は、現代においても顕著に見られる芸術観であり、このような芸術観の下で芸術作品において表現されるものを問うことは、一般的にも未だ議論の余地が大いにある問題でもある。以上の意味において、本発表は、専門研究者のみならず、芸術作品の制作者や鑑賞者にも多くの示唆を与えるものでもある。

### 嗅覚の復権

#### ——フランス啓蒙思想における匂いの哲学的考察

横山奈那（東京藝術大学）

感覚は認識においていかなる意味を持つのか。この問いは古くから論争の火種となってきた。それはプラトンに代表される、感覚は変化の相であるため、真の知識を与えないとする立場と、プロタゴラスやエピクロスなどによる、直接的与件である感覚こそ確実に知識の基礎になると考える立場の戦いであった。その後、前者はデカルトに引き継がれ、後者は感覚主義という形で新たに展開していった。

感覚主義とは、「すべての認識は感覚に由来する」と考える一種の経験論的立場であり、18世紀において広く受け入れられていた。この主張の典型を構築したのは、コンディヤック（Étienne Bonnot de Condillac, 1714-1780）である。彼は『感覚論』（1754年）において、嗅覚から感覚を考察し始め、感覚によって知識、最終的には精神がもたらされると述べた。彼の感覚に対する主張は、ディドロ（Denis Diderot, 1713-1784）、ルソー（Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778）ら、フランスの啓蒙思想家たちに影響を与えた。ディドロは書簡の中で、思考する存在であるわれわれが持つ感覚は、方程式のような複雑な問題を解決し、科学の発展に寄与すると語り、ルソーは『エミール』（1762年）において、人間の悟性に入ってくるすべてのものは、感覚を通じて入ってくるため、人間の最初の理性は感覚的な理性だとする考えを表明した。

彼らはいずれも認識において感覚が果たす役割の重要性を指摘した。そして、これに付随する形で、従来の五感の序列に変化がもたらされた。知性との結びつきが強い視覚ないし聴覚重視の傾向から離れ、触覚を最上位とする新たな序列のピラミッドが構築されたのである。五感の最上位の変更に伴い、その他の感覚の地位も変動した。感覚の優劣に変化が生じる一方で、序列の位置を維持した感覚があった。それは嗅覚である。プラトンやアリストテレスは、嗅覚を序列の中間に位置づけ、デカルトもこれに倣った。感覚主義においても、嗅覚の感覚内での地位は中間である。しかし、匂いの感覚への評価は肯定的なものへと変わり、嗅覚が再評価される契機となった。これにより嗅覚は復権し始めたと言えるだろう。

本発表ではフランスの啓蒙思想家であり感覚主義の立場を取ったコンディヤック、ディドロ、ルソーの哲学における五感の格付けの変化を嗅覚に焦点を当てつつ解明する。従来、嗅覚は五感の中で最も議論の対象とならない感覚であった。その嗅覚が感覚を考察する際に注目されたのは、コンディヤックが『感覚論』の中でこの匂いの感覚を議論の出発点に据えたことによる。そこでまず、彼の嗅覚論について取り上げる。さらに、絵画の内に芳香を表現することの不可能性を批評の中で展開したディドロと、匂いと想像力との関係について言及したルソーの理論を検討する。以上を通じて、本発表では18世紀のフランス啓蒙思想において嗅覚がいかに復権し始めたのかを考察する。